



みどり

令和5年11月30日

調布市立緑ヶ丘小学校

校長 鳥居 圭

E-mail midorigaoka-sho@chofu-schools.jp

その昔、「造形活動」と「宇宙」について、考えたこと

校長 鳥居 圭

過日は本校の展覧会「ミドリンミュージアム」にご多用のところ多数のご参加をいただきましてありがとうございました。個人的な話で恐縮ですが、奇しくもテーマ「宇宙に一つの宝物」というフレーズから、私の遠い昔の記憶が呼び覚まされました・・・。

私は教員になりたての頃から、理科教育を自分の強みとして、よりよい教育活動を目指して研鑽していました。そんな時、教員8年目に初めて異動した学校に着任してきた図工の先生と仲良くなり、彼が主宰していた図工の授業についての研究会をのぞいたりする中で、造形活動についても考えを深めようとしていた時期がありました。

ある日、T大学附属小学校の図工準備室でお昼を食べていた時、隣にいたY国立大学附属小学校の先生に話しかけられました。「鳥居先生は理科がご専門ということですが、理科って一言でいうとどんな教科なんですかね？」私は言いました。「簡単にいうと、自然と対話する学問ですかね。」「まあ、小さいところは素粒子から、大きいところは宇宙まで受けもっている感じですかね。」するとその図工の先生は「そうですか、確かに宇宙は大きいですね。われわれ図工教師は、子供の心の中というか、頭の中の世界をどうしようか、と考えている教科ですからねえ、大きさでいったら、理科にはかなわないかもしれませんね。」と言って微笑みました。自分も若かったので、なんとなくマウントをとった気でいましたが、少し考えて愕然としました。宇宙はみなさんご存じの通りこの世で一番大きな空間だといえますし、赤方偏移といって、まだまだ宇宙は膨らんでいるという傍証も発見されています。が、膨らんでいるということは（「時間」の取扱いはさておいて）宇宙の広さにはどこかに限界があるような気がします。一方どうでしょう。子供たちの頭の中の世界、心の世界には限界があるのでしょうか。ひょっとしたら宇宙よりももっと広い世界がそこにある気がしてきませんか。私はそこで、科学の限界、言い換えれば図工や音楽のような、自分の内なる世界と向き合い、自己と対話し、表現しようとする教科の無限の可能性を示された気がして、たいへんに打ちのめされたのでした。

以前の図工は、作品づくりに係る技能（「本物そっくりに描けたね」など）が大きく評価されすぎていた時代もあったように思います。しかし、少なくとも現在の本校の造形教育で大切にしていることは、「子供たちが自分らしさとは何かを見つめ、それを自分なりに表現しようとする姿」です。会場では、地域の方や保護者の方の感想からも「うちの子らしくてほほえましかった。」「こんなことをこんなふうに表現するんだ、と新たな発見があった。」というような、子供たちの思いを受け止めてくださっている感想があり、我が意を得たり、の思いでした。また、今回初めて取り組んだ「こども学芸員」の試みについても、子供の解説を聞きながら聞いてくださったり、質問をしてくださったりと双方向のコミュニケーションを大切にしてくださった皆様のおかげもあり、子供たちは大きな手ごたえと達成感を感得することができたようです。ありがとうございました。子供たちの自分探しの旅はまだまだ続きます。一人の大人として、そんな彼らの成長を傍らでこれからも応援していけたらと考えます。